

# 会 議 録

- 1 会 議 名 第1回北九州市新ビジョン検討会議
- 2 会 議 種 別 市政運営上会合
- 3 開 催 日 時 令和5年7月27日(木) 9時30分～11時30分
- 4 開 催 場 所 JR九州ステーションホテル小倉 5階 飛翔  
(北九州市小倉北区浅野1-1-1)
- 5 出席者氏名 別添「出席者名簿」のとおり
- 6 会 議 概 要 (1) 配布の資料に基づき事務局より説明し、意見交換。  
(2) 各構成員より、約30年後の北九州市の目指す都市像を検討する上で踏まえるべき、下記の3つの視点からの意見を聴取。  
【3つの視点】
  - ア 将来を見据えた視点での国内外における時代の潮流や転換への対応(課題)
  - イ 現在を見据えた視点での北九州市が持つポテンシャル
  - ウ 過去を見据えた視点での将来も引き継ぐべき北九州市(民)の歴史や価値観

## 7 会 議 経 過 (発 言 内 容)

### 【北九州市の現状に関するデータについて】

- 市内の総生産額や、産業大分類別で1次産業、2次産業別の特徴を出されていて、これは基本的なデータとしては大事だが、どのデータに注目するのが大事かと思う。例えば、付加価値額や、産業別にしても、大きく1次、2次、3次産業という分け方ではなく、中の細かい産業分類を見ないと、北九州市の強みや課題は見えてこないのではないか。
- 北九州の産業構造は、人口的には製造業からサービス業側へ移っていき、サービス業の中でも介護など含めて人がかなり増えており、一般的にいうと賃金の安いところへ人がどんどんシフトしていて、付加価値の高い所への参入ができていない、というところで、若者も転出してしまっているのが課題だと思っている。この部分の分析ができれば、例えば福岡との比較や他の地域との比較も含めて、どういう産業構造であるべきか、一度議論すべきだと思う。経年で変化を見られればありがたい。よく製造業が話題となるが、製造業の生産性はどんどん上がっており、付加価値も上がっているが、そうではない部分が、比率が増えていきながらも、生産

性が上がってこない、というところに焦点を当てていかななくてはいけないのではないか。

○ データだけ見ると気になるのが3つ。

1つ目は、労働力率の低さで、これは働いている人の割合で、北九州市はかなり低い。なぜこんなに働く人が少ないのか、データを万遍なく分析するというより、問題意識をもって深掘りして見たほうが良い。

2つ目は、人口の状況で、大卒者の市内就職率は、毎年2割程度とあり、さらによく見ると、大学は一定で、減っているのは高校の方である。市内就職率が連続して減っている。この原因と対策は調べておいた方が良い。

3つ目は、福岡と北九州市の人口の流入・流出人口について、北九州から福岡への超過の大きい所を見ると、小倉南区と八幡西区。これはおそらく、JRと高速バスの関係があり、通学や通勤で吸われていると思う。マクロ的な都市システムという観点で見ると、実は北九州市も福岡市から浸食されていると思う。この対応をしっかりしていかななくてはいけない。

○ 保健医療・福祉のところで、今回お示しいただいたデータは、かなり厳しいデータばかり出ているが、例えば、死亡率は政令市の中で最下位と出ているが、高齢化率が最も高い北九州市で死亡率が高くなるのはデータとしては当たり前のことになるので、年齢調整死亡率という形で出して比較するのがより状況が分かると思う。

健康寿命については、死亡率など状況が厳しい中で、女性が5番目。この回復力と、また年齢調整死亡率も、2000年と2020年のデータを比較すると北九州は大変改善率が高い。これから10年、20年後にこの改善率で行けば、ここまでもって行けるのではないかというデータの予測など、そのような見通しを出していただければ、これまで頑張ってきたこと、これからさらに頑張るべきことが見えるのではないか。

○ 住環境のデータでなるほどと思ったことがあったのでお伝えしておきたい。北九州の話題の中でアクセス数が多いものを調べたところ、第一位が「北九州、外壁落下」。なぜこんなに壁が落ちるのか、コメント数も非常に多かった。やはり不安になる。このまちですっと住みたいと思えるかどうかは住環境が非常に大切なのだと感じた。

○ 賑わいのところで、小倉のまち、黒崎のまち、都心副都心の状況がどうなっているのか分かるようなデータがあればありがたい。例えば、小倉の小売業の動向や歩行者交通量の変化の状況、また小倉、黒崎はそれぞれ夜の飲食店が特徴的で、北九州の強みであるため、そのあたりの賑わいの状況など。観光客だけではなく、市民が都心でどう楽しんでいるかが分かるようなデータがあれば良い。

○ 大学の中で市内就職率、いま時代が変わり、定年まで同じ会社で働くような素地は全くなくなってきていると思っている。我々の大学でも、出て行って、また戻ってくるという選択肢もかな

り増えている。そういう意味で、大学卒業時の就職率について、市内にどれだけ就職しているかは、高校の場合は地元の間が入学し、卒業時に市内に就職するか市外へ出ていくかということに純減となるが、大学の場合はいったん入学し、そこで教育を受けまた外へ出行くが、学生たちは大学時代に北九州の良さを知った上で世界に散っていく。北九州のことをふと思い返してくれる人材なんだと前向きにとらえることもでき、実際にそういう例も増えてきているのではないか。

- 社会人5年目、6年目となった時に、Iターンやリターンで戻ってきたいという声もかなり多く聞いている。そのような、外に出た北九州にゆかりのある若者の声をどれくらい聞いているのか、そのようなデータがあれば教えてほしい。また、北九州市の東京事務所が市外へどのようなアプローチをしているのか、北九州市に戻ってくるためにどんな対策を打たれているのかを知ることができたら、もっと色々な議論ができるのではないか。

#### 【20年～30年後の北九州市の目指す都市像を検討する上で踏まえるべきキーワード】

- 先ほどの統計の中で北九州市内でホテルが足りなくなっているというデータ、これからおそらく、インバウンドのお客様をどんどん引き込まないといけない状況の中で、ホテルが足りないのは深刻な問題だと思うので、空き家を活用したホテル化事業を考えたい。
- 北九州市はモノづくりのまちとして発展した。ものづくりが下火となっているという見方もあるが、新入社員がどんどん入っている会社もある。全体的に見るのではなく、どこが伸びているのかを見極めて、ものづくりのまちという部分も延ばしていきたい。
- AIを使って、危険な状況になる前により早めに情報が伝えられるようなシステム作りは、今後災害はどこで起きてもおかしくない状況であるため、取り組むべき事案ではないか。また、「外壁落下」について、実際に老朽化対策チームがどういう取り組みをしているのか、この夏休みの間に学校をどう整えて点検をしているのか、その過程を見せていくことが非常に大事で、それが市民の安心につながっていくのではないか。住環境、教育環境は、将来も住み続けたいと思えるまちとしては重要なコンテンツであるため、建物をどのようによみがえらせるのかというビジョンは明確にしていっての方が良い。キーワードは「安心して長く住みたいまちをどうやってつくっていくか」。
- 「成人式」の話題で、市外からはもちろん海外からもアクセスが非常に多く、成人式の若者のパワーは、多様性を認めるまちとして非常にエネルギーがあるので、そういう若い力が逃げないよう「育むまち」として若い力にもあえて目を向けていかななくては、力強い北九州市は作っていけないのではと思う。

- 過去から現在、将来へも引き継ぐべき北九州市としては、ものづくりのまち、専門的な技術を持つ職人の方が非常に多く、技能選手権など世界で活躍される皆さんが居ることは誇りに思うので、ものづくりの職人の皆さんやロボット開発で起業されている方など、そのような方々の顔が見えるような取組が積極的に行われれば、他市にはない強みとなる。
- 北九州市には、ミクニワールドスタジアムという素晴らしいレガシーがある。加えて、大変豊かなスポーツ文化が育まれている。この北九州市の持つ強みを生かし、北九州スポーツタウン構想とも呼べるような、スポーツを軸とした新しいまちづくりの推進を是非とも考えていただきたい。核となるのは、「スマート・ベニュー」と呼ばれるコンセプトで、これはスタジアムを中心に周辺地域のエリアマネジメントも含めて、複合的機能を組み合わせた交流施設やエリアを開発するというもの。狙いは3点あり、1つは「北九州ブランドの構築」、2つ目は、「まちなかの賑わい創出」、3つ目は、「交流人口の拡大」。
- 福祉の分野から、高齢化率が最も高い北九州が先陣を切ってどういう地域へシフトしていくのか、日本の中で見せていく力は期待されるべきものがある。人が生きていくためには、身体に関してはもちろんそうだが、精神的にも、社会的にも自分の居場所、居られる状態、社会的構成をどうするのが期待されると思う。一人暮らし世帯も増えている中で、人が自分の存在価値をもって、この北九州に住み続けられる現状を作ることができれば、「住みやすいまち北九州」を打ち出すことができ、あんなまちに住んでみたいと思われるまちをいかにつくるかが大事である。若い世代を呼び入れるのも大切だが、比重的に多い世代がいかに元気に住み続けられるかが大事。よく高齢者の実態調査をすると、社会に貢献したいと思う方が非常に多いが、その場所がない。ボランティアではなく、それに収入が伴うものであれば、より望む人が多い。自分の力をそこへどうつなげるのか、誰かの一押しや場を設けないとその環境ができにくいということもあるので、30年後の人口構成を含めて見たときに、どんな絵を描くのがいいのかを具体的に練っていければ良いのではないかな。
- 都市計画、アーバンデザインの観点から、都市のインフラが北九州のポテンシャルではないかと思っている。いわゆる、まちをそぞろ歩く、楽しめる条件が整っているのが北九州の強み。世界中の都市がウォークアブルシティに取り組み、日本でも多数の都市で取り組まれている。小倉の都心部はそのポテンシャルを十分に持っている。以前調査で、公共交通で来た人は、自家用車で来た人よりも、街中での滞在時間が長く、より都心で回遊をしているという調査結果が出た。車で来た人は駐車場に止めて、そこで買い物をして2時間の無料駐車券をもらう。そうすると他に行かず、すぐに帰ってしまうという傾向が出た。そういう意味で、公共交通で来た歩行者をいかに大事にするかは、大事な視点ではないかと思っている。
- データを見て、若者の人口減少が最大の課題であると読んだ。日本全体が若者が減っている中で、北九州だけが独り勝ちというのは難しいが、そこは頑張らなくてはいけない。+αでや

りたいのは外国の人材をどう集めていくのか。集まった人たちが市内に残るレベルまでできればと思う。取組としては、製造のまち北九州ということで、理工系を売りにするのかと。Japanese as second language のような高校のクラスを作るなど、留学生の面倒をしっかりとみて、就職に繋げていく。特徴は明確に出す必要があり、それは皆さんと相談してからだと思うが、やはりデジタルトランスフォーメーションに対する力の入れ方はかなり重要ではないか。

私が大学に入学する頃に、システム工学科がやっと国立にでき定員は 50 名程度だったが、今もまだ 200 名程度、トロント大学はこの 10 年で 2,000 人にした。社会が動く方向に圧倒的に力を入れている。国がゆっくりと動く中で、いかに早く動けるかは大きな課題だが、特区を作ってもなんとか前に向かなくてはいけない。あのレベルをはるかに超えるようなものを目指していただきたい。

- 北九州市の良さ、北九州は住みやすいことはよく知られているが、実は働きやすい場所。職住接近が実現できる場所はそう多くない。住みやすくて職場が近い。人間は集まってわいわいがやがややるのが本来の仕事ぶり、業務的なところはテレワークでもいいが、色々なアイデアを出すのは集まってこそだと思う。
- 先ほどウォークブルの話も出たが、やはり欧米ではウォークブルなまちが実現されている。小倉も都心は整備が進んでいるが、残念なのは海岸線。砂浜が護岸工事されているが、美しい海岸を取り戻せればと思っている。
- DX や GX、AI などの技術革新などもあるが、足元を見ると、経済安保やサイバーセキュリティの話、南海トラフなど地震の話が展望される中、BCP といった業務継続も見直さなくてはならない。クリーンな再生可能エネルギーの発電設備の導入であったり、水道料金の安さなど、インフラ基盤を活用して製造業、情報サービス業を含め、改めて北九州市の中で再興していくポテンシャルがあると思っている。
- 小倉祇園太鼓、戸畑提灯大山笠を拝見し、また小倉城などを歩いて拝見すると、改めて観光資源があると感じた。これをいかに活用するか、アピールするかは重要で大きなポテンシャルではないか。また、地価の安さは魅力でもあり、特に若い人たちにとって、職住近接、または住宅取得しやすさなどもあるので、タイパ・コスパを重視する若者にアピールしていくと良いのではないか。
- グリーンの観点から、北九州市はたくさんの街路樹がある。中には楓やイチョウなど紅葉の時期に美しい街路樹が植えられているが、残念なことに紅葉の時期になると大規模な剪定が始まり、美しい紅葉を楽しむこともないまま枝葉がなくなってしまう。これを毎年繰り返している状況。本来暮らしの中でグリーンは、新緑、紅葉を楽しむものであり、育てることも喜びだと思う。グリーンに対する考え方がねじれてしまっていると思う。これから先は、ねじれてし

まった緑に対する考え方を、緑に対する新しい価値観に成長させることができれば、30年後のビジョンを実行していけるような力の源になるのではないかと考える。

- 北九州市のポテンシャルについて、北九州市は様々なジャンルの課題を抱えていると話があったが、課題こそがポテンシャルではないかと捉えている。というのも、グリーンは何と組み合わせても相性が良く、グリーンに特化するよりも、課題や何かと組み合わせることによって、これまでになかったアイデアが生まれることもあるので、「何か組み合わせる」ことで考えていってはどうか。
- 環境について考えたい。目指す方向性とそれをどんなプロセスで実現するのか、この2つについて、1つは北九州市はグリーン成長戦略を作成しており、脱炭素、水素の2つの柱を掲げている。脱炭素は迫られる話であるので否が応でもやらなくてはならない、それとチャレンジングな水素は非常にいい組み合わせだと思っている。もう一つは、サーキュラーエコノミーについて、北九州市はリサイクルを成功させたため、それにかけてサーキュラーエコノミーが強調されるが、サーキュラーエコノミーはリサイクルの話ではなく、製品のライフサイクルをトータルのどうマネジメントするかという話。そうすると、最終製品を作っているメーカーが主導権を握ることとなる。その中で、北九州市は素材型産業なので、その点は弱いと感じている。一方で技術はあり、リサイクルはできるという中、どう強みを生かしてサーキュラーエコノミーをデザインしていくかが課題である。
- 公害克服の歴史が強みだとされているが、具体的にどういう強みなのかというのが出てこない。結局のところ、官民連携でやったという話だと思う。官民連携とは何なのか。最近だと公民連携や官民共創といったりもするが、非常に便利で何にでも使える言葉で皆が使っているが、使っている内容がばらばらでしっかり検討すべきではないか。ビジネスに近い部分と、行政とNPOの連携、協働でも同じ言葉が使われ、指定管理でも使われている。たぶん重点が全く異なると思う。北九州が官民連携パートナーシップで色々なものを実現するというときに、どの階層で、どんな局面で何を重視するのかを設定する必要があるのではないか。
- 北九州市と周辺が強みとして抜けているのが、災害に対する強さ。大きな災害がほとんど起こっておらず、もちろん地震もない。またもう一つは、水資源の豊富さ。新しい産業を誘致するのに十分な水資源がある。このような地理的な要因と、現在の産業構造の位置づけで、特にものづくりの中で忘れていけないのは加工産業の多さである。しかし、加工産業は零細企業が多い。ここの構造転換を図らないとサプライチェーンが変わっていく中では生き残れない。モノづくり技術であっても、単なる加工業でおわるのではなく、リスキリングでDXの技術を取り入れないと生き残れない。高齢者対策も同じで、今までの延長線上では生き残れないため、新しい技術を身につけた人を増やす。その底上げがまちとしては重要だと思う。

○ 未来志向で言うと、新しい産業の誘致が必要。そのための条件として重要な要素は、カーボンニュートラル。再生可能エネルギーが多く、これからは風力も加わるため、100%自主エネルギーでいくということになれば企業誘致にはひとつプラスとなる。ただ、それだけではだめで、もうひとつの要素としては、再生可能エネルギーはスコープ2の段階であるため、スコープ3に対して、例えば運輸・物流、職住接近などを含めて、小さいまちづくりを目指していけば、新しい企業を誘致する際に武器となる。そういうまちづくりを基本的には目指さなければいけない。そこで必要な教育レベルは、大学などたくさんあるし、場合によっては大学と専門学校が協働して新しいビジネスを作っていくこともやらなくてはいけない。そのような素地を増やし、資源を投入していけば、必要な人的資本が多いまちに、必要な企業が集まってくる。そのようなことを目指した未来づくりには必要だと考えている。

○ 子育て・教育の領域から、3点提案する。1点目は、子どもの幸福度ナンバーワンのまちを目指すこと。相対的貧困状態にある子どもがいかに幸せでいられるか、また、中学生20人に1人の不登校の状況もあり、北九州市はフリースクールが非常に少なく、フリースクールに対する助成も少ない状況で、地域の中に教育支援室を含めて、気軽に出かけていけるような居場所が求められる。またヤングケアラーの存在である。核家族が前提となった仕組みの中では、声が上がられない状況の子どもが居るため、まずはこのような子どものデータ上の洗い出しと支援が望まれる。また、必要な療育が受けられない状況がある。さらに外国人材の誘致の話もあったが、外国にルーツのある子どもが安心して教育を受けられる、多様性のある教育環境づくりも急務であるとする。すべての状態にある子どもが幸せでいられるまちづくりを目指していきたいと思う。

2点目は、将来に希望を持てる、出産子育て支援が大事である。将来に希望が持てなければなかなか子どもを持つとは思えない。例えばフランスでは、第3子以降、年金額が10%上乘せになる。将来の安心につながることでセットに提案されている。このように未来につながる支援策が望まれる。

3点目は、地域全体で人と人がつながり、子育てを支援していくために、公的な支援だけでなく、北九州市の人情味のある市民性を活かす。ほっと子育て相談などの子育て支援があるが、支援に結びつくまでには書類がたくさんあったり、マッチングに時間がかかったりと、自然な人とのつながりが作り出せない状況がまだまだある。そのため、例えば、アプリを使ってワンタッチでつながるなど、そういったことが容易になれば、子育てが楽になるのではないかと思う。東南アジアでは「Grab」というアプリが普及しており、このアプリひとつで配車ができ、翻訳機能も付いていて運転手と会話もでき、買い物の決済もアプリひとつで完結する。このような技術を子育て支援にも役立てることができれば母親が楽になるのではないかと思う。今の仕組みは、核家族を前提とした子育て支援策になっており、家族の中でだれかが倒れたら、他の家族が面倒を見るべきという前提で成り立っているため、発想を転換して仕組みづくりを新たにすることが必要がある。その中で温かい市民性を活用していくことができれば、特に50代女性の人口が多いと言われているため、このような人材を活用していければ良いのではないか。

- DX, AI は使い倒す必要があると思っている。そのために、技術人材が集積している北九州は優位性を持っているということ、特に技術系の大学としては、大学の人材をうまく使いたいところがあり、AI でいえば、アプリは学生が簡単に作ってくれる。起業したい学生もたくさんいて、DX, AI 関係ではかなり起業している。そのような人材もうまく利用しながらということがある。大卒生を毎年 6,000 名輩出とあるが、うち 1,000 名を九州工業大学は輩出しており、北九州市の在學生は 3 千数百名いる。この 3 千数百名の学生たちが北九州市に滞在して、何かやってくれるポテンシャルを持っていると考えれば、2 割しか残らないのではなく、その 3 千数百名が 4 年間、もしくは大学院まで含めた 6 年間、博士号までいけば 9 年間も滞在する。彼らは完全に北九州市に対してシンパシーを持ち、色々な形で関わりたいという気持ちも持っていており、彼らをうまく使わない手はないということ。学生の力を活かしていくべきではないか。
  
- キーワードとしては、「グローバル」と「アントレプレナーシップ」。日本全体で若者の人口が減少していることが大きな課題であり、今の若者が北九州市に残ったら良いという訳ではなく、選ばれる北九州市にしていきたいと考えている。北九州市の魅力は世界に発信していくべきだと思っており、海外でもビジネスの機会をさらに増やしていけばいいのではないかと。若い子がどんどん海外へ出て行き、海外で学んだり色々な経験をしたうえで、北九州市の良さを改めて知る機会が増えたり、海外で働いた外貨を北九州に落とすところまでビジネスのチャンスをつなげていければ良いのではないかと。

なお、海外留学生や移住者のデータ、海外からの観光客数の数値などがあればお聞かせいただきたい。
  
- 企業誘致に力を入れるべきと考える。IT 企業や IT ベンチャーが多いまちになれば、若者は必然的に増えていくのではないかと。また、市長をはじめ、市職員のベンチャー気質、熱い気持ちを持っているところが、北九州市の良い所だと思っているため、チャレンジ精神はどんどん若い人が見做っていくべき。スタートアップ関連のサポートもあるが、さらに挑戦しやすいまちにしてほしい。失敗しても何度でも若者にチャレンジさせることが重要ではないかと。
  
- 大きく 3 点。1 点目に必要なのは人口減少に対する労働生産性の向上、給与水準への反映。細かく分けると 1 つは、労働力不足の解消、特にサービス、介護、医療、福祉、建設、輸送の分野で進めていくべきである。ただし、その効率化が人員削減ではなく、新規事業に向かうようなサポートを自治体はやっていくべきだ。小さい方の 2 つ目は、他地域の他企業に対して地元企業の採用力が弱い。一番大きな原因は給与水準が低さである。学生に求人票を見せると、やはり給与が高い所に行く傾向があるので、賃金の底上げ、新規事業開拓につながるような必要がある。特にサービス業・中小企業の DX 化は非常に大事だと考えている。そのためにもぜひ大学を活用していただきたい。北九州市立大学の学生数は 6,700 名で、工学部も抱える大きな大学なので、ぜひ活用いただければと思う。



大きい2点目は、労働力率の改善。他の自治体と比べても非常に低い。ただし、単に働けと言っても働かないので、仕掛けが必要。その中でも特に若年層の定着を見ていくことが重要である。高卒者の定着は大きな問題で、看護やデザイン等の専門学校で外に出るケースが多い。そこを何とか市内に収めていく必要がある。大学生の定着については、言われているほど流出しているわけではなく、大学入学者の2割は地元高校生で卒業後に地元に残るのが2割なので、ダム機能は果たしている。18歳人口に関しては、データ上この先7-8年目が非常に危うい。これまでは減っているものの安定しているが、7-8年先は急減してつるべ落としで下がっている。ここをどう乗り切るかが問題。細かい2点目でいくと、ダイバーシティを推進する必要がある。福岡市や北九州市は人口に占める女性比率が男性より1割程度高い。そのような方がしっかり働ける環境を作っていくことが必要。

大きい3点目、産業構造の転換と都市構造の転換を同時に考えるべきだということ。コンパクトシティ化については、その名称を使うことが難しければ、新たな概念をつくる、いわゆるアフターコンパクトシティを考えていくべきである。それはもちろん防災、空き家の解消、財政の効率化にも影響するので、これを是非進めていき、インフラの集約をすることが必要ではないか。細かい2点目は、新エネルギー産業について、産業学会などで聞いていると、洋上風力はかなり厳しいと口をそろえて言っているが、産業的に厳しいものをなぜやるかをもう一度考える必要があり、それは例えばエネルギーの地産地消、企業誘致の立地要因にするなど、別の価値観を入れていかないと、産業として自立することは難しいのではないか。最後に細かい3点目だが、通勤通学者について、福岡市はどうしても成長していくので、福岡市をどう使うかということ。市長も福岡市と連携を強めているが、今後も福岡市と関係性を強めていく必要がある。八幡西区、小倉南区を福岡市のベッドタウン化し、人口増加を狙い、その利益を市内に循環させる、そういった発想というのが必要だと思う。